

『レディーズ・ホーム・ジャーナル』における 「アメリカン・ヒロイン」についての一考察

秋田 淳子

(岩手大学)

1. はじめに

1620年、Mayflower号に乗船したPilgrim Fathersと呼ばれるイギリスのピューリタンたちが新大陸のPlymouthに上陸した。文明に汚されていない“wilderness”に対峙した開拓者たちは、自分たちを「アメリカのアダム」とみなし、建国の礎を築いていくこととなった。たとえば、R.W.B. Lewisの*The American Adam* (1955)が提示するように、荒野を切り拓いて国家を造っていくアダムの姿は、アメリカにおけるヒーロー像の原点となり、アメリカ人の精神形成の過程において大きな影響力を持つ。同様に、『アメリカン・ヒーローの系譜』において、亀井俊介はアメリカのアダムがアメリカン・ヒーローの原点であり、彼らの理想像となったことを認める。そして、男性の開拓者と共に働いた女性が、ヒロイン像として結実することがなかったことを指摘する。亀井は「アメリカのイヴ」が理想像とならなかった理由を考察し、つぎのように述べる。

ひとつには、イヴが聖書ではアダムを誘惑し、墮落させた張本人になっているからであろう。だがもうひとつには、新世界の建設者たちも、ヨーロッパから社会的、文化的な伝統を背負ってきており、男性中心の価値観をもっていたからに違いない。男性はたくましく開拓に従事することが使命とされたが、女性はその背後にあって、家を守ることが役割とされた。その場合、自然のまま天真に生きるよりも、秩序を愛し道徳を育てることが、女性についての価値観の中心になった。

じっさいには、アメリカの女性も果敢に開拓に従事した。そしてたとえばヨーロッパの「レディー」と比べた時、彼女たちが自然で自由に振舞い、のびのびと自分の力を発揮し、またそれが彼女たちの大きな魅力となっていたことは、古くから、ヨーロッパ人のアメリカ旅行記などにくり返し語られている。[...] それでも、「アメリカのイヴ」は、「アメリカのアダム」のように、ヒーロー像として大きな実を結ぶことが少なかった。彼女たちは男性に伍し、自由にその力を発揮しようとする時、むしろその「女らしさ」からの逸脱を、社会から非難されなければならなかった。(28)

亀井が言及するように、アメリカン・ヒーローの原点を生んだ時代、アメリカン・ヒロインのそれを誕生させることはなかった。共和国時代を経てヴィクトリア朝時代のアメリカは、国家を構成する女性たちの中でも主要な層とみなされていた白人中産階級以上の女性たちに、保守的な「家庭の天使」像を理想の姿として強要していたからである。アメリカの女性たちは、家庭的で、純潔を守り、従順で敬虔であることが要求された。言い換えるならば、女性たちは父権制社会が構築した既存の価値観に従い、家庭という主たる所属

領域を越えることは望まれていなかった。彼女たちに求められた性質は、未踏の地にも果敢に乗り込み、勇気をもって自らの運命にさえも挑んでいこうとする「ヒロイン」の素質とはかけ離れたものだったのである。アメリカ社会は、主体性に基づき、考え、行動するヒロインの登場を望まず、むしろそれを拒む背景をもっていた。

本論においては、開拓時代からヴィクトリア朝時代におけるアメリカン・ヒロインの不在の状況から、その誕生に至る過程を考察したい。同時に、その性質の一面を確認することにもなろう。19世紀末には女性参政権運動の機運が高まっていたように、さまざまな社会運動に関わった女性たちが活躍する時代となっていた。しかし、政治的な活動に関与しない多くの一般大衆の女性たちも、父権制社会が作り上げてきた保守的な女性像の枠組みの外へと意識を拡張させていく時期を迎えていた。

アメリカの大衆女性雑誌は、多くの一般大衆の女性が「ヒロイン」の性質の獲得を目指して意識変革を図るための媒体として、必要不可欠な役を果たした。本論では、アメリカにおいて19世紀末には発行されていた数多くの大衆女性雑誌の中から、白人中産以上の女性読者を対象とし、多くの発行部数を誇っていた *The Ladies' Home Journal* (以下、*LHJ* と記す)を考察対象とし、¹ 同誌のアメリカン・ヒロイン誕生への関与を指摘するとともに、その生成過程の一端にも触れたい。

2. 「アメリカン・ヒロイン」生成の場としての *The Ladies' Home Journal*

2.1. 連載小説の機能:読者との共犯関係の樹立

1883年12月に Louisa Knapp の編集の下に創刊された *LHJ* は、創刊から6年間で100万人を越える定期購読者数を抱える大衆女性雑誌へと成長を遂げた。特に、広告に至る全ての掲載内容を検閲したことで知られる2代目の編集長 Edward Bok は、同誌の女性読者にたいする影響力を確固たるものとし、同時代のアメリカ女性の文化構築に際して大きな力を振った。1920年1月号をもって30年間編集長を務めたボックがその役を降り、また、1950年代にテレビがアメリカ文化に浸透するまで、*LHJ* は白人中産階級以上の女性を主流とするアメリカ文化に、ひとつの「型」を提供し続けた。また、おもに東部の女性文化を牽引していったばかりではなく、西部の辺境地帯に渡った女性や移民たちに、アメリカ女性文化の「主流」の型を示すテキストの役を果たしていたことも知られている。

南北戦争後、多くの大衆女性雑誌が発刊され、19世紀末には熾烈な読者獲得競争が展開され始める。それらの中でも *LHJ* を成功に導くこととなった要因はいくつかあるが、つぎの2点を指摘したい。まず、同誌は、創刊当初から、読者との距離感を縮め、一体感をもたらしことに成功を収めていたことが挙げられる。たとえば、パズルなどのクイズを出し、

¹ *LHJ* に関する情報や先行研究、および、秘密・謎・偶然の3要素の効果に関しては、「1950年代までのアメリカ女性雑誌における女性作家の言説研究」と「19世紀末から20初頭にかけての *The Ladies' Home Journal* における小説作品研究の可能性」を参照のこと。

その解答と正解者の氏名を次号に掲載したり、コラムの執筆者への質問と返答を載せたり、さまざまな懸賞コンテストを展開した。つぎに、各誌が競合する際に最も力を注いだ文学作品の選別にボックの力量が発揮されたことが指摘できる。ファッション、ガーデニング、ダイエットなどの健康に関するコラム、育児、料理、洗濯などの家事全般にたいするアドバイス、また、エディトリアルなどをおもに掲載する大衆女性雑誌は、特に詩や連載小説などの文学作品において各誌の特色を打ち出していた。ボックが名声を確立していた作家を採用したり、良質な作品を多く掲載したことも、*LHJ* の主要な成功要因となった。

LHJ に掲載される小説作品には、各号で読み切りの短い作品と、後に著書の形態で出版されるほどの人気を収めることも多い連載小説の形式をとるものの2種がある。原則、各月に1号発行される雑誌に特有な連載小説という形式は、良質な文学作品を読者に提供する目的に基づき掲載されるだけでなく、次号の刊行へと読者の興味や関心を維持する役を負っていた。連載小説は次号の展開を期待する読者の興味を1ヶ月の間維持することを責務とした。*LHJ* の連載小説作品は単なる文学作品ではなく、読者参加を目指した同誌の主要な戦略としての意図を映した媒体であった。そのため、大衆女性雑誌などを作品の初出媒体とした連載小説には、著書の形態で発表された文学作品を研究対象とする際に適用する評価基準では測りきれない性質が、付与されることとなった。

LHJ をはじめとする大衆女性雑誌の小説研究は、膨大な作品数にも関わらず、いまだ系統だった研究は少ない。それらの作品が恋愛や結婚を主題としたものと一般的にみなされて敬遠されることもあろうが、モダニズム以降の文学作品評価の基準によると「優れた」作品の範疇には入らないとされる特徴をもつことが大きな理由であろう。*LHJ* の連載小説は、語り手の視点をとおした日常のスケッチ描写を主とするもの、そして、非日常的といえるほどのプロット展開が起伏に富むことを特徴とする作品群という2種に大きく分類される。前者に比べて掲載数が多い後者の作品群には、ほぼすべての作品に“secret”と“mystery”という語が頻繁に見られ、プロットの展開には非現実的ともいえる「偶然」の事象が生じている。これらの「秘密」、「謎」、「偶然」という3要素は、読者を作品に関与させる手段として重要な働きを果たす。

3要素のうち、特に、秘密と謎を設定するという仕掛けは、作者、語り手、語り手以外の登場人物という作品に直接関わる要素だけではなく、読者をも作品展開に参加させる。たとえば、読者が作品内に設定された秘密を知っている場合はその展開に加担し、それを知る登場人物たちと共有する。作者のみが秘密を知る場合は、登場人物と共にそれを解明しようとし、次号の展開を期待する。語り手と読者だけがそれを共有する場合は、無知な他の登場人物たちを意識したりもする。作者、語り手、登場人物、読者という4要素は、組み合わせによってさまざまな共有パターンを生み出す。秘密や謎は、作品世界や登場人物たちとの距離を縮め、一体感をもたらす。多くの女性読者は、しばしば語り手となる女性登場人物たちと経験を共有し、秘密や謎を解明する作業に加担することで作品に巻き込まれ、語り手となる女性登場人物と共犯関係を結ぶこととなった。

2. 2. 連載小説における「アメリカン・ヒロイン」の生成

2. 2. 1. 「謎」、「秘密」、「偶然」の効果とアメリカン・ヒロイン

読者を獲得し続けるために仕掛けられた連載小説の効果により、次号の発行を待つ1ヶ月間、多くの読者は共通の感情を経験することとなった。100万人以上の女性読者という大きな集団が、連載小説の登場人物と一体感を強めることにより、同時期に共通の経験をしていたこととなる。Patricia Okkerは*Social Stories: The Magazine Novel in Nineteenth-Century America*において、連載小説の特徴を分析する。そして、それらの作品が、読者という特定の集団の社会的な共同作業によって形成されていることを指摘する。つまり、雑誌に掲載される連載小説の読書体験は個人的な行為を越え、社会的な意味をもつことをオッカーは明示する。

Though the writers, editors, and publishers were rarely consciously trying to create a political collective, the emphasis within the magazine novels on social relations attests to the ongoing project of forging an idea of a group, a society, a nation. (5)

オッカーは、作家、編集者、出版社という複数の要素が、読者の共有体験を生み出していると主張する。大量消費社会の進展につれて、それらに広告主も加わる複数の要素が、連載小説作品を生成していた。読者が参加する連載小説を読む行為は、共有体験をとおして、或る集団に属する女性たちの意識を大きく転換させる可能性をもつ。連載小説を介して成立する個人の経験は、共同体のそれとなり、多くのアメリカ女性の意識を変え得る力を持った。

連載小説の掲載は、1年に渡るものもある。また、一般的に、*LHJ*が対象とした読者層と同年代の女性登場人物が多く描写された。女性読者たちは、親近感を抱いた等身大の登場人物たちと共に、時間をかけて秘密や謎の解明に取り組み、思考力を育んだ。さらに、作品中に生じる偶然の要素がもたらす急激な変化や予想外の出来事にたいする処理の仕方を学んでいった。ボックの時代の*LHJ*は、各号、複数の連載小説を掲載していた。年間をとおすと膨大な数になる女性登場人物が、各々の生き方を展開していたこととなる。女性読者たちは、小説という非日常空間に自己投影することで擬似的な人生の練習を重ねた。時には非現実的にさえみえる偶然の展開は、想定外の場面に直面した際に適切な判断をし、対処法を考え、行動を起こしていくための訓練の場となった。自分自身の力で進まなければ女性登場人物たちが直面する人生の局面は展開することではなく、彼女たちの作品上の軌跡は、読者たちに未知の世界に踏み出す勇気を称賛させ、自立した生き方へと覚醒させることとなった。

Charlotte Perkins Gilman の “The Yellow Wallpaper” (1892) と Kate Chopin の *The Awakening* (1899) は、19世紀末に発表された。両作品は、アメリカ文学において、保守的な女性像にたいする矛盾を意識し始めた女性登場人物を描いた作品としてしばしば言及される。両作品の女性主人公たちは、父権制社会が理想とした伝統的な女性像から逸脱を図ろうとする。

しかし、堅固な価値観に阻まれながらも自己実現を希求する女性たちは、前者が狂気に陥り、後者は死に至る。自由意志に基づき行動する女性たちをアメリカ社会は受容することに容赦なかった。両作品は、女性登場人物たちが自己を囲む壁を意識し、それを乗り越えようと覚醒する過程を描くが、ヒロインとして活躍する場を与えることはない。むしろ、ヒロイン誕生を阻止する社会や文化的な背景の存在が強調される。

ギルマンやショパンの女性登場人物たちは、自分らしい生き方を模索する過程で、さまざまな葛藤を経験し、苦闘する。一方、同時代に膨大に生産された *LHJ* の連載小説における女性登場人物たちは、自我に目覚めたことの代償として苦悶するのではなく、自分の力で考え、行動することで人生を継続させていく。内面的な葛藤が描写されることはほとんどなく、彼女たちが日常生活を積み重ねて行動していく姿が描写される。読者の関心を次号に継続させることが重要な目的となる雑誌を媒体とする連載小説は、登場人物たちの内面の葛藤や苦悩、また、精神世界の機微を追うよりも、彼女たちの大胆な活躍によるダイナミックな展開を重視する傾向がある。非日常的な「偶然」が作品においては生じ、彼女たちを狂気や死に陥る運命から救う。偶然の出来事は、彼女たちを内面に向き合わせて意識を深化させるというよりも、臨機応変に人生に対処していくという、生きるための即戦力を授けた。大衆女性雑誌における連載小説は、多くの女性に大学教育の機会がもたらされなかった時代に、知的な刺激を与えて自我に覚醒させるというよりも、日常生活において自力で行動する勇気を与えることにより、多くの保守的な女性読者たちを変容させていく有効な手段となったのである。*LHJ* の多くの女性登場人物たちの経験や軌跡は多様なものであるが、意志に基づき行動し、運命を切り拓いていくというアメリカン・ヒロインの性質が強調されることとなった。

LHJ が読者を確保するために目指した読者参加型の誌面づくりは、連載小説という効果的な媒体をとおり、女性主人公たちと連帯感を強めた女性読者たちの生き方を変える機会を与えた。彼女たちは、家庭という領域を越えて活躍する登場人物と共に変容を遂げる。そして、共に考え、行動し、経験を共有していく過程において、アメリカン・ヒロインの性質を養っていった。

2. 2. 2. 連載小説の女性登場人物たち:Eleanor Hoyt Brainerd の“The Personal Conduct of Belinda”と Geraldine Bonner の“The Girl at Central”について

Eleanor Hoyt Brainerd の“The Personal Conduct of Belinda” (1909 年 5 月～1910 年 1 月号)の Belinda Carewe は、25 歳であり、高校の女性教師として自立した生活を送っている。作品の冒頭で、彼女は生徒たちが社交界に出る際の付き添い役として、ヨーロッパ諸国をめぐる“chaperoning tour”に旅立つことを友人の教師に相談する。一人で引率をしながら英語の通じない諸国を回ることなどできないと評されるが、ベリンダは初めての地へと旅立つことを決める。容姿にコンプレックスを持ち、思い込みが激しく軽率なところもあるが、彼女は常に前を向いて進み、積極的に新しい経験を求めていく。彼女の欠点に悩む姿や明るく率直な性格は、読者の親近感を得るのを容易にしたであろう。読者たちは、等身大の一人の女性主人公とともにヨーロッパ各地を旅行して教養を深めるとともに、作品に描写され

たさまざまな秘密や謎を解き、偶然の出来事に対処しながら、自分の力で人生に向かっていく女性への軌跡を共有することとなる。

作品には、多くの秘密や謎が描かれる。登場人物たちの打ち明けられない恋愛感情が、各々の登場人物たちの憶測を招き、読者のみが彼らの本当の気持ちという秘密を知りながら行動を見守る。思いを寄せる相手の振る舞いや表情が謎となったり、他者を気遣う配慮から過去の出来事を隠していくなど、秘密が積み重なっていく。小さな秘密や謎が、複雑に絡み合うこともある。しかし、作品は、一人の生徒の駆け落ちの計画という秘密に向けて大きく展開する。彼女が男性が待つ駅に向かったことを知ったベリンダは、それを阻止すべく、深夜、馴染みのない土地を一人で馬車を駆って駅に向かい、汽車に飛び乗る。作品の冒頭、単独で生徒を引率することに不安を感じ、躊躇していたベリンダは、勇敢な行動で駆け落ち相手に立ち向かい、その計画を止める。

ベリンダの一行が偶然のように出会っていた男性が、彼女の生徒から情報を得ていたために待ち伏せが可能であったことが判明するなど、作品の後半では、前半に仕掛けられた秘密や謎も解明され、また、登場人物たちの恋愛関係も誤解が解消されて整理される。容姿に悩み、学校という狭い社会で暮らしていたベリンダは、瞬時に状況を判断し、行動に移すことで生徒を救う女性へと変わっていく。その結果、彼女は結婚相手となる恋人も得て、引率教師の役割を果たして無事に帰国することとなる。

LHJ の連載小説で効果的な手段であった、秘密や謎の解明に読者を巻き込む戦略は、20世紀初頭に“mystery”と付された作品を増やすこととなった。たとえば、Geraldine Bonner の“The Girl at Central: Her Own Story of the Great Hesketh Mystery” (1914年11月～1915年5月号) もそのひとつである。本作品は、機械化が進んだことによりオペレーターが不要となる前の時代の、セントラルと呼ばれていた電話交換局が舞台となる。女性登場人物 Molly Morganthau は New Jersey 州の電話局で交換ボードの前に座り、回線をつなぐという単調なオペレーターの仕事に従事していた。交換局の窓から見かける男性に好意を持つようになっていた彼女は、彼が巻き込まれた殺人事件という謎の解決に向けて、知恵を絞って、行動を起こしていく。受動的な人生を送っていたモリーが、全米中を騒がせた殺人事件の嫌疑をかけられた男性を救うばかりか、謎の解明をする。作品の最後には、事件解決の過程で知り合った新聞記者と結婚をする。

モリーは移民出身である。地道な努力を実らせて採用が困難であった時代にオペレーターの仕事に就いたことや、少ない給料の中でやりくりを工夫して生活する様が描写されるなど、20世紀初頭に増大していた移民の購読者も、彼女に自己投影しやすい登場人物を設定している。自分自身の努力によって、学校を卒業し、職も得ることができるということを示すことにより、モリーに共感をもつ多くの移民出身の読者たちを勇気づけたことであろう。さらに、自分の力で考えて行動することにより、彼女が難事件を解決し、幸福な結婚相手を見つけることになるという軌跡は、能動的な生き方を読者に推奨することとなる。反対に、名家出身で若さと美貌を武器にした女性は、男性たちを翻弄したあげくに殺されてしまう。自分の力で生きていこうとしない女性の未来は閉ざされている。

本作品では、女性が男性に依存していない。自分の知恵と行動力を用いて、モリーが男

性の容疑を晴らす。しかし、作品が提唱するのは、女性が男性に依存することでも、他者から孤立して生きることでもない。モリーと新聞記者の男性が相互に知恵を出し合い、自主性と自由を尊重しながら助け合って事件を解決したように、自立した者同志の関係の樹立を勧めている。新聞記者はモリーの依頼により援助や情報を提供する。また、事件解決をもたらす人物と接触した際に、恐怖と疲労で失神した彼女は、彼に助けられる。

モリーは村のゴシップ、新聞などから断片的な情報を得てそれを論理的に組み立てようとしたり、事件現場を訪問したり、殺された女性と会話した謎の人物の声の主を特定しようと間違いを装った電話をかけて調査を始める。また、それまでは接触のなかった新聞記者の人たちとの交流の場に足を運んで解決の糸口を探ろうとする。謎の解明のために、推理を働かせるだけでなく、彼女は確証を得るために自分自身で行動を起こしていく。モリーは、見知らぬ土地や未知の領域に怯むことなく挑んでいくアメリカン・ヒロインの性質を備えた登場人物として描写される。しかし、他者に配慮することなく自らの運命や境遇に突き進んでいくというよりは、他者を受容し、協力し合いながら目的を達成しようとする柔軟な姿勢をもつ。そうした現実的なヒロイン像は、多くの女性読者たちに自らが置かれた平凡な日常の場においても、自らの力で考えて能動的に行動することにより、各々がヒロインになれる可能性を持ち得ることを示すこととなったであろう。

ボックの強い愛国心を映す *LHJ* は、第一次世界大戦中にアメリカの参戦への支持を前面に打ち出したように、主婦が属する領域を越えた内容を表すこともある。しかし、参政権運動の機運が高まっていた時代にも、概して、政治的な内容を扱わないことに同誌の特徴があった。家事領域全般に関する主題を扱う同誌は、一種の教養を磨く媒体として、女性読者に安心して提供できる雑誌として安定した購買数を維持した。しかし、連載小説における女性登場人物たちの生き方には、「家庭の天使」像を越えていこうとする「新しい女性」への移行が巧妙に隠されている。毎月膨大に生産されていく女性登場人物たちの姿を重ねて掲載していくことにより、同誌の提示する新しい女性像は、読者からの拒絶を回避した。

ギルマンやショパンの新しい女性たちが狂気や死をもってアメリカ社会から末梢される運命を辿らざるを得なかったのとは異なり、連載小説の登場人物たちは、生き生きと自分らしさを発揮して人生を謳歌することを可能とした。駆け落ちを阻止したり、殺人事件を解決するベリンダやモリーというアメリカン・ヒロインは、小説の最後に幸福な結婚を手に入れる。しかし、自己実現を果たした彼女たちは、単に家庭という枠組みの中に戻ることはない。ありのままの彼女たちを評価し、その性質を認める伴侶を自ら選んだ彼女たちは、共に人生に挑んでいく対等な関係のパートナーを得ることで、より大きな飛躍を遂げていくであろうという余韻を残す。両連載小説の女性登場人物たちは、結婚を選択せざるを得ない当時の多くの女性にとり、結婚後にもアメリカン・ヒロインとなり得る可能性を示している。

連載小説における女性登場人物たちの生き方が数を重ねて提示されることにより、政治的なレベルではないにしろ、同時代の女性たちの意識を根本から変えていく力を得ることとなった。女性登場人物たちの生きる力は、一般大衆の女性読者の意識の深層部分に潜んで浸透し、父権制の中で構築されていた既存の女性像を転換させていく力を増幅させてい

ったのである。連載小説をとおして、各々の女性読者たちは自分の力で考え、行動する「ヒロイン」へと変容を遂げていく。

3. おわりに

多民族国家を前提とするアメリカは、国家を統括して堅固な集団とするためにアメリカン・ヒーローを必要とした。アダムを原型とするヒーロー像は神話性すら帯びることとなった。憧憬を体現するアメリカン・ヒーローと国民の男性の間には距離があり、彼らはそれを理想に掲げて各々が邁進していった。距離があるからこそ、アメリカン・ヒーローは偶像視され、永遠の理想であり続けられた。アメリカン・ヒーロー像を提示することは、多くの国民にとって集団意識を共有するための効果を発揮する。新しい国家を建設していくために、ヒーロー像の確立は不可欠であった。

現実社会の中から理想となる者、あるいは想像上の人物を探し、それを偶像化していくというアメリカン・ヒーロー生成の過程が進行していた状況とは異なり、アメリカン・ヒロインは不在の時代が続いた。アメリカン・ヒロインに関する既存のモデルはなく、アメリカの女性たちは、それを創造していかなければならなかった。ヒロイン像の不在により、各々の女性が理想像を創り、それを追うこととなった。*LHJ* の連載小説の女性登場人物たちは、女性読者にさまざまな生き方のモデルを提供し、彼女たちが自由で自分らしい生き方を模索することを助ける。国家建設のひとつの大義としてヒーロー像を共有することで団結を図っていた男性たちとは異なり、女性たちは自分自身のヒロイン像を抱くことにより、自分らしく、柔軟で、伸び伸びと自然に生きることが可能となった。つまり、アメリカン・ヒロインの不在が、各々のアメリカ女性にとり、自分自身がヒロインとなる可能性があることを確信させることとなった。

アメリカン・ヒロイン像とアメリカ女性たちの間に距離はない。それは偶像化や理想化された単なる憧憬の対象として存在するのではなく、理想を実現するためのより現実的な目標にすぎないからである。アメリカン・ヒロインとは、それを達成した、自分自身なのである。同誌の女性登場人物たちは、荒野ではなく、自らの日常生活や人生を切り拓いて力強く生きていく。彼女たちの経験を共有した多くの読者が、アメリカン・ヒロインとなり得る潜在的な力を認識し、自らの力としていった。こうした過程は、既存のヒロインのモデルが不在の中、各々の読者がそれになり得るといふ新しい国家のヒロイン像誕生の軌跡を映し出しているといえよう。

アメリカン・ヒロインは、特定の集団が抱くひとつの理想像ではない。それは、自由意志を持って生きていこうとする各々の女性が抱く、現実達成していく目標である。理想像に向かって邁進する女性たちは皆、アメリカン・ヒロインなのである。

参考文献

秋田淳子. 「1950年代までのアメリカ女性雑誌における女性作家の言説研究」.

平成16年度～18年度科学研究費補助金（基盤研究（C）），研究成果報告書，全95頁.

---. 「19世紀末から20世紀初頭にかけての *The Ladies' Home Journal* における小説作品研究の可能性」.

『東北アメリカ文学研究』（日本アメリカ文学会東北支部 No. 31），2007年，pp. 19-43.

---. 「『レディーズ・ホーム・ジャーナル』における電話—不在の意味」.

『メディアと文学が表象するアメリカ』（山下昇編著）. 東京：英宝社, 2009年，pp. 121-41.

亀井俊介. 『アメリカン・ヒーローの系譜』. 東京：研究社出版，1993年.

Okker, Patricia. *Social Stories: The Magazine Novel in Nineteenth-Century America*.

Charlottesville: U of Virginia P, 2003.

The Ladies' Home Journal. The Curtis Publishing Co.

A Study of the American Heroine in the *Ladies' Home Journal*

In *The Genealogy of the American Hero* (1993), Professor Kamei Shunsuke points out that Americans have had a strong affiliation toward the idea of a hero, even from the time their Puritan ancestors landed in the New World. Creating their heroes based on their idea of the ideal person, Americans tended to mystify and share the heroes they created among themselves, which then served as a common icon, especially during the era of conquering the wilderness to create a nation. Pioneer Americans identified themselves as a kind of Adam, an “American Adam” in the New World which they saw as a kind of Eden, and this has become the foundation for the American idea of a hero. While even nowadays the descendants of the American Adam search for a hero, who at times may even be an anti-hero, they have not accepted the idea of an “American Eve,” that is, a heroine who is free of traditional Old World ideas and values. This heroine should have pioneered the American wilderness and cultivated her talents, ambitions, and desires, in the new world with her own hands. At that time, Americans valued women, especially white, native-born, middle-class women that lived up to the image of women being the “angel of the home,” meekly doing all of the housework. Those women were prevented from going beyond the accepted traditional and conservative values, and were forced to conform to an idealized image, that of an angel.

Because the idea of patriarchy prevailed in America, it was difficult to cultivate a climate in which Americans were easily able to create and share the image of an American Eve. American literature at the turn of the 19th century saw many women writers publish their works; for example, Charlotte Perkins Gilman wrote “The Yellow Wallpaper” (1892) and Kate Chopin released *The Awakening* (1899). Their literary heroines, who were pioneers of the New Woman, reflect the atmosphere prevalent at a time when the rights of women in society were being expanded and strengthened. Though the heroines in both works are trying to overcome the image of the conservative female role being forced upon them and live by their own values, the patriarchal society does not allow them to live freely, eventually leading to insanity to the former and death for the latter. At the turn of the 19th century in the United States, they were unable to survive in contemporary America as American heroines.

In my presentation I have attempted to analyze the content of the *Ladies' Home Journal*, which was first published in 1883, reaching a circulation to a million subscribers in 1889. Many scholars of cultural studies, women's studies, and journalism have pointed out the pivotal role of the magazine in establishing and transforming the prevailing sense of values among female readers. While the contemporary society of the turn of the 19th century was not conducive to the appearance of American heroines and the fulfilling of their own ambitions, we will read many articles and literary works dealing with female characters in the magazine. I will attempt to study the image of women that the *Ladies' Home Journal* presented to the readers, which is sure to show the core of the image of the ideal American woman at that time to those who read it today. It is possible to see some common characteristics of American heroines in the female characters depicted in the magazine. Generally speaking, the popular women's magazine had a variety of content, such as editorials, advice columns, and advertisements. But among these, it was the serialized novel that was most effective in attracting readers to the magazine, especially around the turn of the 19th century. In my presentation, which centers on the heroines in some serialized novels in the *Ladies' Home Journal*, comparing them with other types of content in the magazine, I also intend to deal with aspects of the process of creating the image of the American heroine.

Junko AKITA, Université d'Iwate